文化芸術による地域経済活性化モデルのためのパイロット事業

「点→面のまちづくり展開」実績報告書

有限会社　春華堂

ー目次ー

1. 事業の目的
1-1.スイーツバンクの誕生
1-2.スイーツバンクの役割
1-3.「ツノがたつ」と「ツノをたてる会」
1-4.匿名希望展
1-5.浜松卸商団地との出会い
1-6.計画の現状

2.町の概況
2-1.浜松市
2-2.浜松市中区神田町
2-3.浜松卸商団地

3.アーティストとの視察
3-1.視察概要
3-2.意見交換

4.今後の展望
4-1.目指す姿
4-2.アート、デザインの役割
4-3.推進のための課題

5.文化芸術やクリエイターの関わりに対する期待
5-1.春華堂とアーティストの取り組み例
5-2.アーティストは新たな視点、気づきを与える存在

6.まとめ
6-1.スイーツバンクがまちに与えた影響
6-2.点をつなぎ、面にする

1.事業の目的
本事業は、地元企業やクリエイターからなるコミュニティ「ツノをたてる会」、「神田町大通り発展会」「浜松卸商団地」などを中心に、春華堂が本社を置く浜松市中区神田町と、そこから車で5分ほどの場所にある浜松卸商団地（浜松市南区卸本町）を連携させた、にぎわいづくりの実現に向け、アーティストならではの新しい視点を交えながらコンセプトやコンテンツを検討するものである。

1-1.スイーツバンクの誕生
春華堂には、それぞれ特徴的な3つの施設がある。

1	うなぎパイファクトリー 浜松市西区大久保町	オープン：2005年4月 コンセプト：「うなぎパイのひみつを知ろう」 コロナ禍前には、年間70万人近くが訪れる全国トップクラスの産業観光施設。
2	nicoe（ニコエ） 浜松市浜北区染地台	オープン：2014年7月 コンセプト：「お菓子の新しい文化とスタイルを発信する、スイーツ・コミュニティ」 親子で楽しめるものづくり体験など「食育」と「職育」に力を入れる。
3	SWEETS BANK （スイーツバンク） 浜松市中区神田町	オープン：2021年4月 コンセプト：「おいしい思い出をためよう」 本社や売店の他に、コミュニティルームを併設。ワークショップやアート展など、人と人とのつながりを大切にした企画を行う。

「SWEETS　BANK（以下、スイーツバンク）」には、本社機能の他、春華堂の菓子店とベーカリー＆カフェ、浜松いわた信用金庫森田支店が入居する。13倍にスケールアウトしたダイニングテーブルと椅子が並び、その下にお菓子（店舗）が並ぶ姿は、春華堂が大切にしている「家族の団らん」を現代風にアレンジしたもの。連日多くの人が訪れ、写真撮影を楽しむ姿を見ることができる。

1-2.スイーツバンクの役割
スイーツバンクが誕生した場所にはもともと春華堂の本社と工場があったが、施設の老朽化に伴い新社屋建設の計画が立ち上がった。敷地面積やアクセスなど、より条件のよい候補地もあったが、変わらずこの場所を選んだのは、「浜松・神田町でビジネスを行い、成長させてもらった地域への恩返し」「50年先、100年先も、この地域とともに事業を継続していく」という山崎社長の意思表示でもある。そんな思いを象徴する場所が、コミュニティスペース「ツノがたつ」だ。

1-3.「ツノがたつ」と「ツノをたてる会」
「ツノがたつ」の構想段階で意識したことは、起業家やスタートアップ支援といった行政や銀行が行うようなものではなく、春華堂ならではの役割は何かということ。世界に名だたる企業が多くある浜松市は、転勤を機に暮らしはじめる人も少なくない。注目したのは、夫の転機に伴い、これまでのスキルや趣味、特技を生かし切れていない女性の存在だった。音楽が好き、図書館司書の資格を持ち読み聞かせができるなど、起業するまでではないが、自分の趣味や才能を生かしたいという思いを受け止め、彼女たちが活躍できる場、人とつながる場を目的に、コミュニティスペース「ツノがたつ」が誕生した。女性だけの利用に限らず、これまでにヨガ教室、英会話教室、カリグラフィー講座などが開催された。また、地元企業やビジネスパーソンなどが参加し、定期的にミーティングを行うコミュニティ「ツノをたてる会」も発足。地域活性に向けた意見交換が定期的に行われている。

「ツノをたてる会」の主な参加者	・Co-startup Space & Community FUSE（浜松いわた信用金庫） ・株式会社静岡新聞社 ・株式会社mocha-chai（デザイン事務所） ・ATLAS LLC.（不動産プロジェクトマネジメント会社） ・有限会社春華堂

1-4.匿名希望展
スイーツバンクの取り組みの一つとして、2021年10月30日から11月28日までの約1ヶ月間開催した「匿名希望展　in　HAMAMATSU」がある。これは、有名アーティスト、デザイナー、タレント、パティシエ、学生、小さな子どもたちなど、100名近い方々の作品を匿名で展示販売するチャリティーアートイベントだ。開催の目的は大きく3つ挙げられる。

1. 地元の人にアートを楽しんでもらう
2. アートを通して将来を担う次世代が夢を描き、未来を創造できるようにする
3. 人と地域をつなぐことで、地域の活性化に貢献する

作品の収益は、浜松市に拠点を構える「認定NPO法人クリエイティブサポートレッツ」に寄付した。さらに、匿名希望展で得られた成果の一例を下に示す。

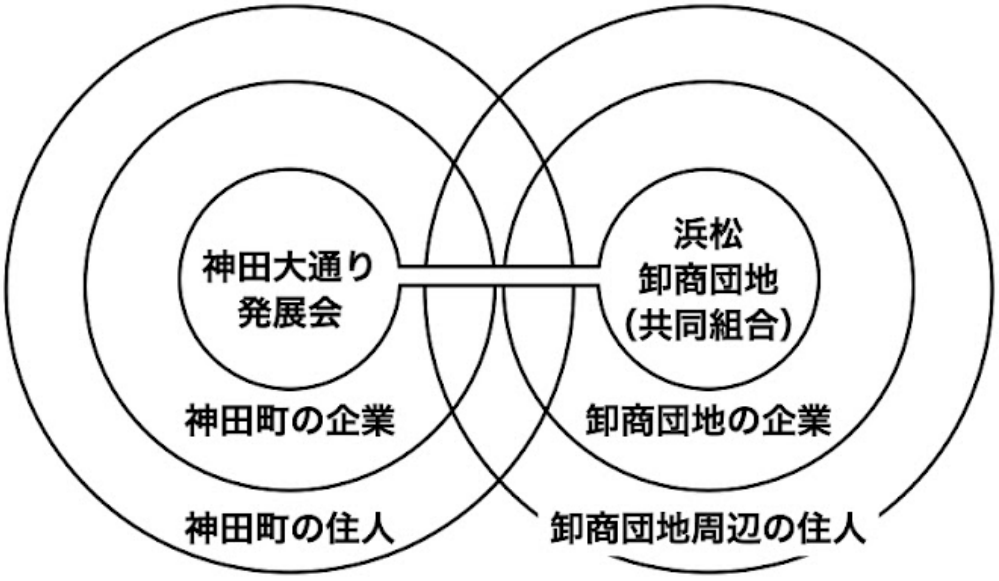
・新たな出会いの創出
アートに興味がある層だけでなく、お菓子を買いに来たお客さま、スイーツバンクの建築に興味があり来店したお客さまが立ち寄り、偶発的にアートと触れる機会が生まれた。

・アートへの関心が育まれる
「これなら私も参加できる」と話す小さな子どもや、「匿名希望展で初めてアート作品を買った」という人など、アートに対する敷居の高さを払拭させることができた。

・他地域へ波及
愛知県岡崎市から訪問した教育関連のお客さまから、「自分の地域でも匿名希望展を開催したい」との言葉をいただく。神田町での活動が、他地域にも広がろうとしている。

1-5.浜松卸商団地との出会い
「ツノをたてる会」で地域活性化に向けた議論を進める中で、メンバーの1人が浜松卸商団地共同組合「浜松卸商センター」の役員から、エリア活性化の相談を受けていたことが分かった。別のメンバーからは、第2回匿名希望展として浜松卸商団地内でウォールアートをしてみたら面白いのではないかという意見が出た。春華堂が本社を置く神田町と浜松卸商団地をひも付け、連携させることで両地域の活性化を目指すアイデアが生まれ、今回の「点→面のまちづくり展開」に発展していった。

1-6.計画の現状
神田町と浜松卸商団地の連携ということで、春華堂が旗振り役になるのではなく、関わる人たち全員が主体的に取り組むことが重要である。そのためには、神田町の企業からなる自治組織「神田町大通り発展会」や、浜松卸商団地の企業を巻き込む必要がある。現在は関係各所にアプローチしている段階であり、今後、2つの地域の関係者が参加するワークショップの開催を検討している。神田大通り発展会と浜松卸商団地から始まる協働事業が、神田町や浜松卸商団地の企業を巻き込み、さらに両地域に住む人たちとの関わりの場を創造することを目指している。



神田町・浜松卸商団地が互いに影響を与え合い、エリアとして発展

2.町の概況

2-1.浜松市

立地	静岡県西部に位置し、首都圏と関西圏のほぼ中間
面積	1,558平方キロメートル。2番目に広い行政区域を持つ
人口	約80万人が暮らす政令指定都市

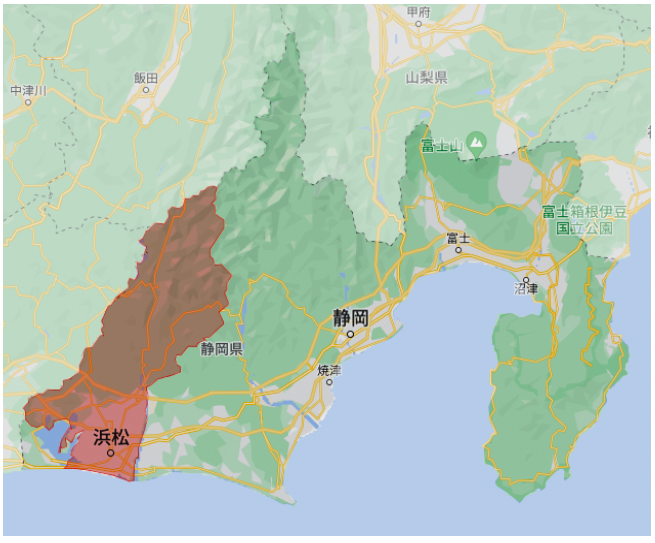
特徴	東を天竜川、南に遠州灘、西に浜名湖、北に天竜の山々に囲まれる自然豊かな都市。近年ではサーフィンやマリンスポーツを楽しめる場所としても人気が高い。古くは繊維業に始まり、自動車やオートバイ、楽器、光技術などの高度な産業技術が培われ、世界に名だたる企業が本社を置く工業都市でもある

2-2.浜松市中区神田町

立地	JR浜松駅の南西に位置し、車で10分ほど 住宅の他、工場、店舗、田畑などからなる
面積	1平方キロメートル
人口	総数3,610人、世帯総数1,459世帯 近年では20代から30代の若い世代の流入が目立つ
特徴	神田地区の企業20社ほどからなる自治組織「神田大通り発展会」があり、道路整備や街灯の取り付け、防犯協力、情報交換などを行っている

2-3.浜松卸商団地（浜松市南区卸本町、米津町の各一部）

立地	JR浜松駅の南に位置し、車で10分ほど 南側には国道1号線が走る
面積	0.195平方キロメートル
人口	繊維業を中心に、100社ほどの企業が集積
特徴	繊維を中心とする卸商の事業者が、昭和40年代の高度経済成長による交通事情の悪化と、手狭になった中心市街地の問屋街から郊外への移転を検討する。土地区画整理事業による基盤整備を行い、1971年に「浜松卸商団地」が完成した。1990年には国道1号線の南側にも拡張。現在は繊維卸売業以外の企業も増え、浜松市の物流拠点の一つに数えられる。近年では空き物件を活用した小売業や飲食業などの出店、雑貨市が開催されるなど、盛り上がりを見せている



浜松市の位置関係

神田町と浜松卸商団地の位置関係

3.アーティストとの視察

3-1.視察概要

2022年3月3日、浜松市出身の現代アーティスト・鈴木康広氏を招き、スイーツバンクおよび浜松卸商団地の視察を行い、まちの印象や今後の可能性について意見交換を行った。

視察の様子。電柱がほとんどなく低層階の建物が並ぶ風景は、どこか海外のような佇まい。インテリアショップ（写真右）や飲食店など、ここ数年新しい店舗が増えつつある。

3-2.意見交換

■鈴木康広氏

・浜松卸商団地は、アメリカのブルックリンのようでもあり、北京や上海のような新しさとアジアらしさの両方を感じる場所であった。自分が若手作家であれば、ここにアトリエを借りたかったと思うほど、ワクワクする場所だった。

・浜松卸商団地で商売を営むある施設のオーナーと話をしたが、私たちが大人になるにつれて無意識に捨ててきている「あそび場」をつくろうとしている人たちだった。卸商団地は人々が自分で遊びを見つけられるような場所になり得るのではないかと思った。自分自身の作品制作もまた、人の心の中にあるあそび心を顕在化させる行為であり、「見立て」というキーワードはよく扱うテーマでもある。

・ツノをたてる会に集まっている方々は、まちに必要なものとは何か、みんなで考える会とも言えるのではないか。その人々と「見立て」をテーマに、まちのさまざまな要素を発見するワークショップをするのも面白いかもしれない。

■間宮純也（春華堂 常務取締役）

・浜松にはアートに触れられる場所として浜松市美術館や鴨江アートセンターなどがある。しかし、それらは「アート好きな人のための場所」。自分たちとしては学校の枠にとらわれない場所を増やすことが必要であり、子どもの頃からアートやデザインに触れられる場所をつくることが大事だと考える。

・アーティストには「アートはこうあるべきだ」という限定をしないでいてほしい。

・アーティストだけでなく誰もが参加できることが重要。自分がいいと思ったものをいいと言って構わないことを伝えたい。

4.今後の展望

4-1.目指す姿

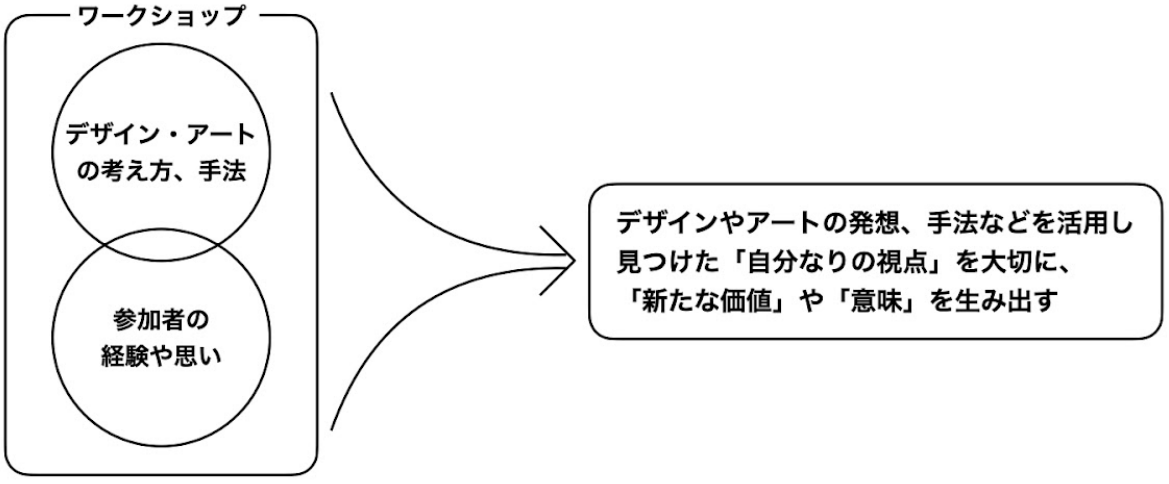
江戸時代から繊維業や製材業などが盛んな浜松は、繊維業から自動織機、製材業から木工加工業へと発展した。戦後には、オートバイ、自動車、楽器、光・電子産業など、世界を代表する企業を輩出し、“ものづくりのまち・浜松”として全国に知られている。静岡県西部には「やらまいか」という方言がある。これは「あれこれ考える前に、まずは行動してみよう」というチャレンジ精神を表し、クリエイティブなマインドが風土として受け継がれてきた。

昭和30年代、浜松にはオートバイメーカーが大小40社ほどあり、互いに知識や技術を教え合いながら産業を盛り上げていった。このような相乗効果のあるものづくりや思いが、「やらまいか」の源と言えるのかもしれない。個人の好きやスキルでつながる「ツノがたつ」では、自分にとって有益な誰かと付き合う場ではなく、関わった人たちと何かを生み出す場としてチャレンジしていきたい。出会い、感じ、小さくても思いついたことをまずやってみる。その延長線上に、これからの“ものづくりのまち・浜松”があると考える。

4-2.デザイン、アートの役割

デザイン経営といった言葉が注目を集めるなど、デザインの考え方、アート思考、ビジュアルコミュニケーションの重要性は日に日に高まっている。例えば、企業理念などを幅広い世代に言葉で伝えようとすると、抽象的で、難解な表現におちいりやすい。しかし、目で見て、感じられるビジュアルであれば、世代や言葉が違っても伝えることができる。

この手法は、まちづくりにおいても有効だと考える。「このようなまちにしたい」とビジュアルを提示することは、言葉で説明する以上に見る人にインパクトを与え、ものごとを前に進める原動力にもなる。また、絵を描くことは、特別な才能がある人だけでなく、誰でも行える点も強調したい。子どもが描く絵からは、まちに対する夢や期待を、大人の絵からは、まちが抱える課題を知ることができる。互いの絵を見せ合い、語り合い生まれたまちの未来図は、時代や人が変わっても確かに受け継がれていくはずだ。



4-3.推進のための課題

事業の推進にあたって、以下の課題が挙げられる。

1）事業をコーディネートし、推進する人材の確保
春華堂の本業は菓子製造であり、まちづくりの専門家ではない。当該事業には、まちづくりの一員として関わっていくのが基本的なスタンスだ。そのため、春華堂と同じ目線で会話できるコーディネーターの存在が欠かせない。全体を俯瞰し、事業を推進し、さらにアーティストとの調整できる人材の確保は、喫緊の課題と言える。

2）関係者の思いをまとめ、可視化するツールの必要性
事業がスタートして間もないため、関係者の中でもビジョンやゴールはまだ統一できていない。関係者の目線を合わせ、思いをより多くの人に届けるためにも、ビジュアルを活用したツールの作成が必要であり、それを形にできるデザイナーなどが求められる。

3）アーティストの選定
アイデアが短時間に次々と出てくるタイプ、思索を重ねアイデアを練るタイプなど、その特性はアーティストによってさまざまだ。限られた時間の中で成果を出さなければならない当該事業において、アーティストの特性を考慮し、短期・中期・長期的な計画を立て、それぞれに適したアーティストをアサインすることが重要である。アーツカウンシルしずおかが持つ情報やアドバイスを活用したい。

5.文化芸術やクリエイターの関わりに対する期待

5-1.春華堂とアーティストの取り組み例

これまで春華堂がアーティストと取り組んだ事例の幾つかを下記に紹介する。

1）ニコエ
ニコエの建設にあたり、建築、食、デザイン、音楽、スタッフのユニフォームなど、日本を代表するさまざまなクリエイターがプロジェクトに参画。ディスプレイ監修は、浜松市中区にある写真集を専門に扱う書店「BOOKS AND PRINTS」が担当した。

2）カカオラボ
カカオを使った食育を体験できる体験型Bean to Bar施設「カカオラボ」。参加者がつくるオリジナルチョコレートの形状、パッケージ、ロゴなどを、現代アーティストの鈴木康広氏がデザイン。

3）春華堂の仕事
「精一杯働くとは」「三惚れ主義」など、歴代社長が大切にしているメッセージを子どもや従業員へ伝えるためのツールを、現代アーティストの鈴木康広氏がプロデュース。言葉だけでは伝わりにくい思いを、パラパラ漫画という手法を使ったアイデアが秀逸。

5-2.アーティストは新たな視点、気づきを与える存在
アーティストの考えは自由で、我々の想像がつかないアイデアに驚かされる。そんな視点や発想から見つけたまちの魅力は、浜松に住む人たちへの新たな気づきになり、観光客といった来訪者の興味をひきつけるものになるはずだ。その点で、アーティストやクリエイターの

知見を活かしたワークショップは有益だと考える。例えば、自分の歴史を振り返るワークショップの考え方を参考に、まちの歴史を知り、未来をデザインするというワークショップがあっても面白いのではないだろうか。

6.まとめ

6-1.スイーツバンクがまちに与えた影響

スイーツバンクが誕生して1年がたち、少しずつではあるが、神田町に変化が生まれている。

- **道路をはさんだ西側にある陶磁器販売をする株式会社丸八の店舗がリニューアル。駐車場の一角には大きなカップのオブジェが飾られている。**
- **南側にある130年の歴史を持つ「御菓子司こぎく」が2022年6月にリニューアル予定。**
- **近隣工場建屋の塗装塗り替え**

6-2.点をつなぎ、面にする

当該事業だけでなく、静岡県立浜松南高等学校家庭部とのコラボスイーツ開発「アオハネプロジェクト」は２年目を迎える。また、コロナ禍で延期されていた、小中学生を対象にした農を通じたビジネス体験「浜松ジュニアビレッジ」の実施の予定。さら「ツノがたつ」での講座やセミナーなども継続し、「ツノをたてる会」を中心に、第2回匿名希望展も進めていきたい。そんな一つひとつの小さなアクションが影響し合い、さらに大きなアクションにつながっていくことを期待する。それは、夜空に浮かぶ小さな星と星をつなげ、新しい星座を描くことに似ているかもしれない。アーティストの知見を借り、多くの人を巻き込みながら、当該事業を推進していきたい。